



Title	胡風の「理想主義者時代」に関する考察：東南大学 附属中学の教育（1923-1925）を中心に
Author(s)	方, 逸韻
Citation	アジア太平洋論叢. 2024, 26(1), p. 65-80
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95110
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

胡風の「理想主義者時代」に関する考察 －東南大学附属中学の教育（1923－1925）を中心に－

A Study of Hu Feng's "Age of the Idealist" : Centred on education at the High School Affiliated to Southeast University

方 逸韻*
FANG Yiyun

Abstract

The focus of this article is the "Age of the Idealist" of the Chinese literary critic Hu Feng (1902-1985), who studied in Japan from 1929 to 1933. Upon his return from Japan, Hu Feng regarded his participation in the proletarian literary movement in Japan as a turning point in his life and positioned himself as a failed idealist before going to Japan.

However, the "Age of the Idealist" should not be overlooked as a prelude to his studies in Japan. According to memoirs, diaries and other writings, "Age of the Idealist" was a period when Hu Feng was a student at the High School Affiliated to Southeast University (1923-1925). He stated that he was disturbed by the contradiction between his love of literature and his concern for society during the high school days. In order to analyze the formation of the contradiction between literature and society, this essay will examine the content of the courses he took and will summarize the characteristics of his high school education. In general, this essay is an analysis of the significance of Hu Feng's high school education.

Keywords: Hu Feng, the High School Affiliated to Southeast University

I はじめに

1934 年に、日本から帰国した胡風は、日本の留学およびその以前の時代を回想した「理想主義者時代的回憶」を執筆した。彼は 1931 年の日本での芸術学研究会参加を人生の境目として、1931 年以前の自分を「敗れ去った理想主義者」と位置づけ、以下のように述べている。

友人の日比君がはじめて僕をつれてそこ〔東京神田区にある江戸川ビル〕の「芸術学研究会」に参加したのは、二年後のことであった。

部屋の真ん中に長くて古いテーブルがあった。周りの破れた椅子とビール箱に人がいっぱい座っていた。熱心な人もいるし、穏やかな人もいるが、みんな誠実な顔をしていた。彼らは大きくない声で発言し、議論し、さらに争ったこともあったが、その主張は日本の文芸界と大衆の間で大きく響いていた。あの煙草の煙のたちこめた息のつまる空気の中で、僕は、私という敗れ去った理想主義者というものがどんなものであったかを理解し、七、八年間まわりつてきた社会観と芸術観の矛盾が解けた⁽¹⁾（胡 1934:267）。

1929 年に、胡風は東京に行き、1931 年に慶應大学文学部英吉利文学科に入学し、同級生の誘いにより、日本プロレタリア科学研究所⁽²⁾に属する芸術学研究会に参加した。日本プロレタリア運動への参加の意義について、胡風は以下のように語っている。

1931 年に、芸術理論で啓蒙的な教育を与えてくれた何人かの友人と出会うまで、私と文芸との関わりは、自分の欲求を満たす、文芸の世界で自分を発見して向上させることに限られていた。その表れの一つは、「文芸批評」を非常に軽蔑していたことだ。他人が心血を注いだ成果をあれこれと勝手気ままに話して、良いか悪いかを言うのは、最も情けないものだ

* 大阪大学大学院人文学研究科・博士後期課程

思っていた⁽³⁾ (胡 1936:3)。

つまり、日本のプロレタリア芸術運動に参加する中で、胡風はプロレタリア文芸理論を学習し、文芸批評を軽蔑していた態度を改め、文芸批評家になることを決心するに至った。

胡風にとって、日本留学が人生の方向を決める転換点であったことは事実であろう。彼が日本で何を学んだのかは確かに重要な問題であるが、その問題を解明するにあたり、胡風が七、八年間にわたって悩んでいた社会観と芸術観の矛盾を見逃してはなるまい。胡風の妻である梅志によると、胡風は蔵原惟人の「芸術的方法についての感想」⁽⁴⁾を読んだことがあり、その文章が胡風へ与えた影響について、梅志は以下のように回想している。

地下で活動していた蔵原惟人が「古川莊一郎」という名前でかいた「芸術的方法についての感想」が『ナップ』で発表されると、かれ〔胡風〕が長年解決できなかったいくつかの理論的問題が解決され、かれのその後の批評文執筆に最初の促進作用を果たした⁽⁵⁾ (梅 1998:226-227)。

この「長年解決できなかった理論的問題」、言い換えると「社会観と芸術観の矛盾」を解消し得たからこそ、胡風は蔵原惟人の「芸術的方法についての感想」に共鳴を示し、文芸批評家を志すようになったのである。よって、胡風本人は日本留学以前の自分を「敗れ去った理想主義者」と否定的に語っているものの、胡風がいう「理想主義者」としての時期は胡風研究にとって重要視すべき問題をはらんでいたと思われる。

胡風の語りによると、1931年に芸術学研究会へ参加した際に、彼は社会観と芸術観との矛盾を持っていたために、自分を「敗れ去った理想主義者」と思うようになった。この矛盾は「七、八年間まとわりついてきた」ことだと述べているので、胡風が矛盾を感じ始めたのは、1924年、1925年のころであったであろう。この時期は胡風の東南大学附属中学（中学とは中等教育機関を指し、初級中学（中学校に相当）と高級中学（高等学校に相当）からなる。以下、東大附中在学期である。

この時期は、文学団体の成立が相次ぎ、雑誌が多く刊行されるなど、文学活動が活発化することにより、新文学が経済的な影響力を持ち始める時期と軌を一にする。このような動きの中で、新文学を用いて社会改革に尽力するという『新青年』同人や文学研究会の主張よりも、文学理論や作品の創作方法など、新文学そのものが重視されるようになった。しかし、新文学に傾倒した文学青年とは、ただ文学の流行を追う者であり、さらに、青年たちを惹きつけた新文学が、青年の注意を社会への関心から背けたと批判する声もあった⁽⁶⁾。

東大附中時期の胡風も、こうした新文学が実際の社会改革から離脱しつつある状況に面していた。この時期の生活について、胡風は以下のように述べている。

N城〔南京〕での二年あまりの生活では、大学のW君と私より一学年下のY君に促され、私はより多くを知り、社会により関心をもって触れるようになった。ただ、同時に文学の息吹にもますます敏感になり、ますます夢中になったのであった。この時に読んだ本二冊に私は没頭した。それはトルストイ『復活』および厨川白村『苦悶の象征』だ。恋愛と芸術は、人生において何が至上のものを表現する両面であるかのようであり、私の社会的行為としたいに矛盾しはじめるようになった⁽⁷⁾ (胡 1934:262)。

こうした新文学に熱中した一方で、友人に影響されて社会に関心を持つようになった胡風は、政治運動に熱心な政治青年であったというより、新文学の魅力に惹きつけられた一人の文学青年であったといえよう。先行研究が指摘した通り、日本留学以前の胡風は、まだ自らを共産主義者として自覚することがなく、ただ普通の文学青年として、理論的裏付けのない感性的な社会的運動の昂揚に影響されていた⁽⁸⁾。

胡風の内面における文学と社会の矛盾がいかに形成されたのかについて考える際に、読書経験や周りの人からの影響も無視できないものであるが、彼の東大附中における経歴にも注目す

べきであろう。

日本留学以前の胡風に関する研究では、「理想主義者時代」に発表した文章の全体的な分析、および大学退学後の胡風の考えを考察したもの⁽⁹⁾の他に、東大附中の在学期についても先駆的考察がある。例えば、呉宝林は東大附中の教職員と学生が発行した雑誌『東南大学附中週刊』掲載の文章を分析し、胡風の東大附中における活動を考察した⁽¹⁰⁾。当該論文では、胡風の文芸論における「自我拡張」論や作者の「Passion」論などの概念に関する言説は、胡風が東大附中時期に書いた文章の中にすでに現れていたとし、また、胡風の社会に対する関心は、東大附中におけるスピーチ大会の参加、およびその国文教師の穆濟波⁽¹¹⁾と関わっていると指摘している。胡風が東大附中時期に受けた教育に注目した点に本論は大きな示唆を受けた。

本論は、胡風の東大附中の在学期間、特に彼が受けた教育のシステムや個別科目の内容に焦点を当てる。具体的には、まず 1920 年代初期の東大附中における教育改革、およびそのカリキュラムを整理する。次に、胡風が東大附中でどのような内容の教育を受けたのかを解明する。特に必修科目の社会科、および国語・国文教育に注目し、その特徴を明らかにしたい。そして、以上の分析を通し胡風の「理想主義者時代」を検討し、胡風の内面における文学と社会の対立的構造がいかに形成されたのかを考える。総じて、胡風にとって東大附中における教育がどのような意義を持っていたのか解明したい。

II 1920 年代初期の東大附中における教育改革

胡風年表⁽¹²⁾によると、胡風は 1923 年夏から 1925 年夏まで、東大附中の高級中学（高等学校に相当）に在学していた。また、「国立東南大学附属中学校録取新生通告」によると、張光人〔胡風の本名〕は 1923 年に「高中一年級插班正取生」として合格した⁽¹³⁾。その時の学年・学期⁽¹⁴⁾の規定によると、胡風は 1923 年 9 月から 1924 年 6 月まで高級中学の一年生であり、1924 年 9 月から 1925 年 6 月まで二年生であったことがわかる。

東大附中の沿革を説明するために、まず東南大学の歴史を見てみよう⁽¹⁵⁾。1921 年に成立した東南大学は、1914 年に成立した南京高等師範学校（以下「南京高師」）を改組した学校である。東南大学の創立準備期に、まず南京高師の教育科、農業科、工業科及び商業科を拡大し、大学の専攻に改組することが計画された。また、教員、校舎や資金なども南京高師から継承された。南京高師の学長である郭秉文も東南大学の学長として継続して勤務していた。

東南大学の成立初期の 1921 年には、南京高師はまだ存在したが、学生の受け入れは中止していた。1923 年には、南京高師の全ての学生が東南大学に編入し、「南京高師」という学校名の使用も停止された。以上のように、東南大学と南京高師の間には、教育面での継承関係があったといえるだろう。

南京高師が東南大学に改組され、その教務科の管轄となった南京高師附属中学（以下「南高附中」）は東南大学教務科の管理下におかれ、東大附中として初級中学と高級中学が設けられた。胡風が在学していた 1920 年代初期の東大附中について、梅志は以下のように回想している。

この学校は実験的学校で、新しい教育方法で全国に名を馳せた。学校ではドルトンプランを行った。アメリカのデューイのプラグマティズムに影響され、比較的自由かつオープンな教育が行われ、あらゆる面で生徒の能力を育成していた。啓黄中学における保守的で後進的な封建主義的な教育方法とは全く異なるものであった⁽¹⁶⁾（梅 1998:121）。

引用文における「啓黄中学」は、胡風が 1920 年から 1923 年まで通っていた武漢にある初級中学である⁽¹⁷⁾。啓黄中学と違い、東大附中では「ドルトンプラン」が行われ、また「デューイのプラグマティズム」に影響されていたという。

まず東大附中におけるドルトンプランを簡単に紹介していく。東大附中でドルトンプランを行っていたのは、胡風が在学する高級中学ではなく、初級中学であった。ドルトンプラン（Dalton Plan）とは⁽¹⁸⁾、アメリカの教育家ヘレン・パーカーが 1908 年に、詰め込み型の教

育の問題点を意識した上で、「自由」「協同」に基づく提唱した教育法である。その大きな特徴は、一人ひとりの能力、要求に応じて学習課題や学習場所を選び、自主的に学習を進めることである。ドルトンプランは中国教育界へ紹介された 1921 年以降、多くの学校で採用された⁽¹⁹⁾。東大附中では、ドルトンプランの効果を検証するために、1923 年に初級中学の一年生及び二年生を対象として実験が行われた⁽²⁰⁾。

梅志が述べているように、胡風が高級中学に入学した 1923 年に、東大附中では、アメリカの哲学者・教育学者のデューイのプラグマティズムの影響を受けた教育改革⁽²¹⁾が行われていた。デューイとは、アメリカの学者であるジョン・デューイ (1859-1952) のことであり、プラグマティズムの代表者として広く知られている哲学者・教育学者である。

プラグマティズム (pragmatism) は、日本語では「実用主義」「実際主義」、中国語では「実験主義」と訳されることが多い。それはギリシア語で、「行為」「実践」「実験」「活動」などを意味する「プラグマ (pragma)」に語源があり、真理や観念を人間の行為や実践から切り離すのではなく、行為や探究の実践のプロセスとその結果の観点から理解しようとする立場である⁽²²⁾。

デューイは知識を行為、経験、コミュニケーションの実践と結びつけ、真理や観念を可謬的で、探究的で、実験的なものととらえるプラグマティズムの思想から大いに刺激を受け、自らの教育思想を展開している⁽²³⁾。その教育思想は、1919 年 4 月の来華により中国に大きな影響を与えた。

デューイは中国での 2 年間の滞在の中で、200 回以上の講演を行い、その内容は教育哲学、社会教育、平民教育など幅広い範囲にわたる。講演の概要をまとめると、デューイが中国で発表した講演の特徴は、中国の当時の国情に基づき、社会教育の重要性を強調する点にあると指摘される⁽²⁴⁾。例えば、学校教育は社会の進歩のためのものであり、学校教育では社会の問題や世界の時流を詳しく学ばなければならないことなどを主張する。デューイが伝えたかったのは、学校が社会の一部であり、人間が社会に対する関心を持つには、学科による知識を得る必要があるという考えである⁽²⁵⁾。胡適の言葉を借りて説明すると、それは「実際の教育制度に対するデューイの二大主張は、一つに、学校そのものが社会的な生活であり、社会生活に必要な種々の条件をもっていなくてはならない。二つには、学校での学業は、学校外の生活と一貫してなくてはならない」⁽²⁶⁾ということである。

デューイの中国訪問を積極的に推進したのは、コロンビア大学の在職時 (1904-1930) の学生たちである胡適 (1891-1962)、陶行知 (1891-1946) や郭秉文 (1879-1967) である。三人の中でも、郭秉文は当時南京高師の教務主任であり、陶行知は南京高師の教授であった。また、デューイの訪中を準備している間に、江蘇省教育会、北京大学や南京高師などを中心とする雑誌『新教育』が 1919 年 2 月に創刊され、デューイの思想を紹介する文章が多数掲載されていた。これらの文章の作者は、前述の陶行知と郭秉文の他に、陳鶴琴 (1892-1982)、鄭曉滄 (1892-1979) や汪懋祖 (1891-1949) など、コロンビア大学でデューイに師事した、南京高師の教授たちが大部分を占めていた⁽²⁷⁾。

中国におけるデューイの教育思想の広がり进行分析する際には、1922 年 11 月の「壬戌学制」⁽²⁸⁾の成立などが、制度設計の面から大きな役割を果たす。胡適は研究対象として論じられることが多いが⁽²⁹⁾、実践の面では南京高師に集っていた教育者たちにも注目すべきである。学校と社会とのつながりを強調するデューイの教育思想への関心は、南京高師と継承関係を持つ東南大学の時期にも続いており、南京高師・東南大学と密接な関係を持ち、その教育の実験場だとみなされる附属中学⁽³⁰⁾に影響を与えていたことも自然である。

1923 年の東大附中の教育改革の主導者は、その教務主任を務めた廖世承である。廖世承は 1919 年のブラウン大学卒業後、南京高師学長となった郭秉文に誘われて帰国し、南京高師の教科教授として務めながら、附属中学の主任にもなった。

「壬戌学制」が制定された前年の 1921 年 10 月に、まず「学制系統草案」が決議された⁽³¹⁾。その後、廖世承をはじめとする教職員たちは、その草案に基づき、東大附中で教育改革を推進し始めた⁽³²⁾。東大附中における教育改革は、「三・三制」と「分科選科制」を中心とするもので

あった。つまり、中等教育の修業年限を 6 年、それぞれ初級中学（3 年）・高級中学（3 年）とした。また、「分科選科制」とは、学生の進路と志望に応じ、職業準備の職業科、進学希望者が集う普通科、師範科を設立したことである。科ごとに選択科目をおき、学生は自らの興味に従い選択できる⁽³³⁾。梅志によると⁽³⁴⁾、胡風は進学予備の普通科に属する文系（第一系）を選んだことがわかる。

胡風の東大附中における履修科目を明らかにするために、まず履修の規則を確認する。東大附中高級中学の学生は、「必修科目」と「選択科目」を履修することができた。現段階では、胡風が「選択科目」の中から何を履修したのか確かめるのは困難であるため、まず「必修科目」に絞る。文系の「必修科目」の中には、「共同必修」および「分系・分科必修」がある。

「共同必修」は、学生が所属する分系・分科に関わらず、すべての学生が履修するものであった。その内容と単位を以下の表 1 にまとめた。卒業必要単位から見ると、「共同必修」は全ての科目を履修しなければならない。

表 1 東大附中高級中学・共同必修科目

共同必修科目	学科	単位
文言科	国語	20
	外国語〔英語〕	28
社会科	人生哲学	4
	社会問題	4
体育科	体育	6
	常識医学	2
単位総計		64
卒業必要単位		64

出典：廖世承 1924『施行新学制後之東大附中』、68-69 頁。

「分系・分科必修」は、それぞれの分系・分科の学生が履修するものであった。「文系必修」の内容と単位を以下の表 2 にまとめた。「文系必修」科目の単位とその卒業必要単位から見ると、「必修」と呼ばれるものの、全ての科目を履修する必要はなく、選択必修科目にあたる。

表 2 東大附中高級中学・文系必修科目

文系必修科目	単位
本国史（上）（下）	6
本国地理（上）（下）	6
東亜史（上）（下）	6
西洋史（上）（下）	6
世界地理（上）（下）	6
数学（上）（下）	16
動植物（上）（下）	6
普通物理（上）（下）	10
普通化学（上）（下）	10
理化補篇	4
単位総計	76
卒業必要単位	48

出典：廖世承 1924『施行新学制後之東大附中』、68-70 頁。

以上のように、東大附中は「三・三制」および「分科選科制」を中心に教育改革を行った。その改革の目的は、「青年の個性の発展」や「教育効果の向上」⁽³⁵⁾などの他に、学校と社会とのつながりへの提唱も読み取れる。例えば、「分科選科制」に関して、「卒業後社会に貢献するために、職業教育組、および師範組を設ける」⁽³⁶⁾と記されている。また、初級中学と高級中

学の必修科目について、以下のように提案している⁽³⁷⁾。

私たちは初級中学の必修科目に「社会常識」、高級中学の必修科目に「世界文化史」を加えることを主張する。なぜなら、現在の中学生は社会常識が非常に欠けており、彼らは近代の各国における学術、政治および宗教の状況にも全く関心がないからだ（廖 1924:3）。

「社会常識」の対象は初級中学の学生であったが、胡風が所属していた高級中学の文系でも社会科が文学とともに重要視された⁽³⁸⁾。現在、胡風が履修した文系必修科目と選択科目を確認できないという資料の制約があるため、当時の学校教育から胡風個人が何を得たかという事柄に関する本論文の以下の考察では、デューイの教育学説の特徴に注意しながら、「共同必修」科目における社会科および文言科の内容を中心に、胡風がその中から何を得たのかを分析したい。

III 東大附中における社会科の教育について

表1が示したように、東大附中高級中学の共同必修科目の「社会科」は、「人生哲学」と「社会問題」の二科目である。新学制が行われた後の1924年の「各科課程大綱」⁽³⁹⁾では、「社会科」という学科がないが、「社会学」は初級中学必修科目である公民学と合わせて、「公民学及社会学課程綱要」⁽⁴⁰⁾に掲載されており、その教育目標は、以下のように述べられている⁽⁴¹⁾。

本授業の教育目標を一言で言えば、学生に現代の社会生活に適応するよう教えることである。学生に現在の社会における良いことに尽力し、社会の悪いものに対しては急進的な改革者になってもらう。具体的には以下の通り。

- (1) 学生に他人と自分との関係を理解させる。
- (2) 学生に様々な団体における自分の位置付けを理解させる。
- (3) 学校、家庭とその他の社会機構、および社会事業の変遷と傾向を学生に理解させる。
- (4) 様々な社会生活の問題点および対応法を学生に理解させる。
- (5) 集団生活に参加する意気込みと習慣を学生に身につけさせる。
- (6) 学生の思想、感情と行動を社会化する。同時に、学生を独立した自治的な国民にさせる（廖 1924:160-161）。

こうした教育目標に基づき、「社会学」はテーマ別で「団体生活」、「社会生活問題」、「産業社会」、「政治と政府」という四つの部分に分けられ、計十八章の内容が挙げられている。例えば、第一部分の「団体生活」は、「学校」、「家庭」、「友人と集会」、「私と他人」に分かれている。その中の「学校」という章では、東大附中の歴史や教育信条を紹介した上で、その最後には「いかに中学生として行動するのか」という内容がある。第二部分「社会生活問題」における「公共衛生」という章でも、公共衛生の重要性や内容を語った後、いかに公共衛生を保つのかについて述べる。つまり、身の回りの環境を意識した上で、外部の環境に合わせる行動基準を語るといった論理を展開していると思われる。

現在、各章の具体的な内容は確定できないが、以上の資料によると、自己中心ではなく、個人と他人、および社会との繋がりへの意識、そして社会問題への関心を喚起する傾向が読み取れる。

1924年の「公民学及社会学課程綱要」には、「人生哲学」と「社会問題」に関する具体的な記述はないが、東大附中で初めて教育改革が行われた1922年の「各種課程大綱」⁽⁴²⁾には、「人生哲学」と「社会研究」という科目がある。胡風が入学した1923年9月に、その名前と内容が変わった可能性はあるが、参照に値すると思われる。以下、1922年の授業概要に基づき、その二科目の内容を述べたい。

1922年の「各種課程大綱」には、「人生哲学」が高級中学の共同選択科目、および文科と教育科の必修科目として記載されている。「人生哲学」の教育目標が書かれていないが、授業内

容⁽⁴³⁾を見ると、おおよそ以下の四つの部分に分かれる。その一つ目は団体生活に関することで、例えば「原始の団体生活」や「団体の道徳」などである。二つ目は学生の道徳教育に関する内容で、「道徳的生活における理性の位置付け」や「道徳的生活における義務の位置付け」などである。三つ目は「団体の道徳から個人の道徳へ」などの個人と団体の関係に関する内容である。四つ目は「経済秩序の原理」や「市民の社会と政治的国家」など、社会の経済状況や政治状況に関するものである。

また、1924年の「公民学及社会学課程綱要」には「社会問題」という科目もないが、1922年の「各種課程大綱」には、「社会研究」が高級中学の共同選択科目として存在し、「本授業の目的は、学生が社会における個々の問題を正確に研究し、社会を改善するために自らの責任を果たせるようにすることである」⁽⁴⁴⁾と記している。

「社会研究」の授業内容には二十章⁽⁴⁵⁾が挙げられている。テーマから見れば、第一章から第五章は、「個人と社会との関係」という一章を出発点として、社会研究の必要性和方法を述べている。第六章から第十四章は、障害者問題や公共衛生問題などを社会研究の対象として挙げている。第十五章以降は、社会主義や共産主義などの内容が紹介され、最後には「私たちの理想的な社会」という章が設けられている。

以上、「人生哲学」と「社会研究」の内容をまとめると、そのかなめは社会学の目的と一致していると思われる。つまり、個人を超えて、他人との関係や自身が置かれた社会の問題を意識した上で行動する、ということである。

こうした社会学の授業をうけた胡風は、1924年に「現在の青年何以不喜団結—答劉巍君」を発表した。タイトルが示すように、胡風はこの文章で現在の青年たちがなぜ団結しないかを分析している。いくつかの理由の中でも、最も重要な点は以下のように述べられている。

最も重要な理由は、時代が変わったことに誰も気づいていないからだ。かつては、全ての国政が君主、将軍や大臣に任されていたが、現在ではまさに「天下の興亡、匹夫に責有り」となっている。昔の儒学者は、乱世の時にただ「帰去来兮」を書いても問題なかったが、私たちは現在、社会に対する個人の責任を捨てざるわけにはいかない。自分をひいきしてはいけないし、「いつかは」などと標榜するのもいけない。最も良いのは、直ちに団結し、自ら責任を負うことだ。社会生活の面から見ても、個人の素質から見ても、団結は私たちの生活の一部だ⁽⁴⁶⁾(胡 1924:143-144)。

つまり、「団結」は青年たちが社会に対する責任を果たすための有効な手段であると胡風は考えている。胡風は青年たちが一人で行動することではなく、団体で活動することをよびかけているが、最終的かつて最も重要な目的は、社会に対する自らの責任を負うことである。こうした「団結」および「社会問題」を強調することは、まさに「人生哲学」と「社会研究」からなる東大附中の社会学授業の教育目標であると言える。胡風は東大附中の社会学の授業から得たのは、社会問題への関心、および団体生活、或いは団結の力を用いて、自らの社会に対する責任を果たすことであつたと思われる。

「公民学及社会学課程綱要」の最後には、その授業のやり方について、スピーチ、見学や現地の調査などの実践のほかにも、「他の学科と関係付けること。特に国文科と社会科との関係を重視すること」⁽⁴⁷⁾と記述されている。国文の授業はいかに社会科と関係付けられたのか、また、文学愛好者の胡風は、東大附中でどのような国文教育を受けたのは、次の節で検討する。

IV 東大附中の国語・国文教育をめぐって

胡風の在学時、東大附中には国語と国文という二種類の科目があった。共同必修科目の国語と、選択科目の国文である。当時の東大附中の国語・国文教育について、東大附中の卒業生である陳鑒は以下のように回想している。

語文（当時は国文と呼ばれた）の先生たちには、二つの派閥があった。一つは、古典文学と古典詩詞を専攻する陳席儒先生と薛鴻猷先生であった。彼らは学才があり、学生たちの古典文学に対する嗜好に影響を与えた。もう一派は白話文を提唱する孫俚工先生と穆濟波先生であった。この二人の先生は思想が進歩的で、学生たちが多くの進歩的な本や雑誌を読むよう導いた。そのため、クラスメートの中で、例えば一六級〔民国 16 年〕以前の張光人（胡風）、一六級の顧衡（中略）などは、早くに革命に参加した。その中の一部は名を残す革命の烈士になった⁽⁴⁸⁾（陳 1992:39）。

陳鑒の回想によると、当時の東大附中には、古典文学派と新文学派の二つがあった。中国では、1920 年の「国民学校令」の修正と共に、白話文を教える「国語科」が生まれ、学校における本格的な国語（白話文）教育が開始された⁽⁴⁹⁾。1920 年に、胡適は理想的国語教育の基準について、国語（白話）を用いて自由に思想を表現し、作文、スピーチと談話の中に、文法上の誤りがないことと述べている⁽⁵⁰⁾。つまり、中学では白話で正確に書き話す能力が望まれたのである。

このような新文学の新興および白話文の教育の提唱を背景として、当時の東大附中の初級中学の国語・国文教育でも、白話文の運用能力と新文学の作品が重視されていた。授業概要には、国語の作文や国語での読み上げなどの運用能力に関する要求が詳しく記されている。さらに、魯迅『呐喊』や胡適の短編小説などの白話の作品集が参考書として挙げられている⁽⁵¹⁾。

ところが、初級中学と異なり、高級中学における国語・国文教育では、明らかに文言文に傾いていたことが読み取れる。

まず、共同必修科目の国語科の教育目標には、計 7 つの目標があげられたが、その中では文言文の練習や古代文人の人生観の理解など、古典文学と関わる目標が半分以上を占めている⁽⁵²⁾。高級中学国語科の精読書籍および通読書籍を、以下の表 3 に、また、三年生の精読書および通読書は掲載されていないが、第三学年の国語授業について、以下の表 4 にまとめた。

表 3：東大附中高級中学・共同必修国語科精読・通読書籍（1 年・2 年）

学年	精読書	通読書
一年	唐宋元明清古文三十篇	『水滸伝』
	『論語』	『大学』『中庸』
	唐宋詩三十首	『新文芸評論』〔俚工編、民智書局、1923 年〕
		『域外小説集』〔魯迅、出版情報不明〕
		『梁任公近著第一輯』〔梁啓超、商務印書館。上編は 1922 年、下編は 1923 年に出版した〕
二年	『史記菁華録』〔清・姚芑田、商務印書館、出版年不明〕	『詩経』節本
	『左伝菁華録』〔清・吳増祺、商務印書館、出版年不明〕	『国語』節本
	『漢書』十篇	『国策』節本
	『楚辭』十篇	『礼記』節本

出典：廖世承 1924『施行新学制後之東大附中』、84-86 頁。

表 4：東大附中高級中学・共同必修国語科（3 年）

科目	授業範囲	参考用教科書
国学概論	甲部：六芸概論 〔『漢書芸文誌・六芸略』等〕	章太炎『国学概論』〔上海泰東書局、1923 年〕
	乙部：史伝概論 〔『四書提要史部総叙』等〕	

	丙部：諸子概論 〔『漢書芸文誌・諸子略』等〕	
	丁部：集部概論 〔『四書提要集部総叙』等〕	
文学概論	甲部：中国文学概論	劉学濟『文学論』〔長沙湘鄂印刷公司、1922年〕
	乙部：西洋文学概論	Winchester "Principle of Literary Criticism" 〔商務印書館、『文学評論之原理』、1923年〕

出典：廖世承 1924『施行新学制後之東大附中』、84-86頁。

以上の表を見ると、一年生と二年生の精読・通読書では、古典文学関連の本が主な部分を占めている。新文学と関わるのは、魯迅『域外小説集』と俚工『新文芸評論』の2冊しかない。古典文学を重視する傾向が顕著に示されている。

また、高級中学選択科目の国文科も古典に傾いていた。「課程綱要」⁽⁵³⁾では、選択科目の国文科は、国文A「国学常識」、国文B「学術文」、国文C「文芸文」が設けられている。Aの国学常識の内容は、文字学や古典籍の校訂と注釈などである。Bの学術文とは、老子や孔子などの諸子に関する近代の学術論著を指している。また、Cの文芸文は詩歌、小説、演劇と評論に分かれ、古代と近代のそれぞれの作品が含まれる。

全体から見ると、共同必修科目の国語科と選択科目の国文科は、新文学より古典文学、言い換えると経史子集が含まれる「国故」を重視したとも言えるだろう。

ところが、孫俚工や穆濟波のような新文学と白話文の教育の提唱者もいた。この二人は、東大附中高級中学における新文学教育の二つの特徴を示していると思われる。

東大附中の教員を回想した時に、胡風は「当時、附中の主任は見識がある進歩的な教育者である廖世承だった。教員の中には穆濟波、嚴濟慈、孫俚工、李儒勉、楊効春などもおり、みな進歩的であった」⁽⁵⁴⁾と述べている。胡風が高級中学一年生の時の民国12年度（1923.9-1924.6）に、孫俚工は高級中学一年生の「共同必修」科目である国語科の二人の担当教員の一人⁽⁵⁵⁾であった。また、上記の表3で示されるように、孫俚工主編『新文芸評論』は、高級中学一年の国語科の通読書として挙げられている。胡風が孫俚工の授業を受け、その本を読んだことがあった可能性は高いと推測される。

1923年に上海民智書局により出版された『新文芸評論』の主な内容は、自然主義や新ロマン派、近代フランス文学の主流、明治維新以降の日本小説界など、近代文学の思潮を紹介したものである。また、モーパッサンやジョージ・バーナード・ショーなどの作家の作品の特徴と芸術観に関する評論が収録されている。『新文芸評論』の冒頭には、孫俚工による二篇の文章⁽⁵⁶⁾が掲載され、編集意図が述べられている。特に注目に値するのは、孫俚工が「純文学」と「雑文学」を区別していた点である。

孫俚工はまず表⁽⁵⁷⁾を用いて文学を分類する。その表の内容をまとめると、孫俚工から見ると、文学には「文」と「詩」の二種類があるという。ここでの「文」と「詩」は文学のジャンルではなく、「感情」と「知識」を基準とするものである。感情的文学は「詩」と見なされ、小説、劇や抒情文なども「詩」に属している。それに対して、歴史、政治や社会に関する評論文と叙述文は知的文学である「文」と見なされる。孫俚工は以下のようにまとめている。

前に少し触れたように、文芸の内容は詩歌、小説と劇である。文芸ではない雑文学と区別するために、この三つは純文学ともいう。（中略）純文学の特徴は感情的であり、その内容と形式は、美の表現を目的とする。雑文学の特徴は知的であり、その目的は実用性を持つことだ。よって、文学を実用の文章（普通文）と美術の文章（美文）に分ける人もいる⁽⁵⁸⁾（孫1922:5）。

以上のように「感情」と「知識」を標準として「純文学」と「雑文学」を区別した上で、孫

俚工は国文科、特に古典文学の内容を分析し、現在の中等教育の国文科では「純文学」より「雑文学」が重要視されていると結論づけた。さらに、こうした現状を批判し、中等教育においては、「雑文学」より、感情的な「純文学」を重視すべきだと述べている⁽⁵⁹⁾。

ところが、孫と同様に白話文と新文学を提唱した穆済波の立場は、孫俚工とはいくらかの相違がある。それでは、穆済波はなぜ白話文を提唱したのか。それは、感情の表現のための純文学を唱えるためではなく、学生の時事問題と社会問題への関心を喚起するためである。穆済波について、梅志は胡風の伝記でこのように書いている。

特に国文のクラスでは、古代から現代までの全てのことについて、自分の考えを自由に話せた。先生はただみんなの議論を導き、またみんなの考えをまとめるだけであつた。先生は穆済波といい、四川省の人であつた。古典文学についての造詣が深く、新文学の本も多くに読んでいた。聞くところによると、彼はもともと四川で肖楚女などの人と一緒に革命活動を行い、進歩的な新聞を作ったことがあつた。後に政治を離れて教職に転向した⁽⁶⁰⁾ (梅 1998:121)。

ここの「肖楚女」は、蕭楚女 (1891-1927) のことを指している。穆済波は、1921 年に蕭楚女と惲代英 (1895-1931) とともに四川省瀘州にある川南師範学堂に勤めていた。また、「進歩的な新聞」とは、穆済波が編集であり、蕭楚女が主筆であつた『新蜀報』を指す。東大附中の教師として務めた時期に、穆済波は蕭楚女および惲代英と良い関係を保ち、二人を学校の講演に招いたこともあつた⁽⁶¹⁾。

先行研究⁽⁶²⁾では、穆済波の国文教育の特徴は、時事問題や社会問題を意味する「国勢」の重視であると指摘されている。具体的には、穆は東大附中の初級中学の国文授業を担当していたときに、白話文に限らず、古典文を教える際にも、単語の解釈や文章の作法の教授ではなく、学生が社会問題を議論することを促したという。また、穆は 1924 年に東大附中の初級中学二年生の白話文の授業を担当していた時に、冰心の詩や王統照の小説など、強い抒情性を持っている作品を、教科書の中から削除したという。

この特徴は、穆済波の高級中学の国語・国文教育の中にも現れている。1925 年に、穆済波は新学制を実行する高級中学の必修国語科の教材『高級国語読本』⁽⁶³⁾を編集し、その目的を以下のように述べている。

学習者たちに読書生活の中で、現代国家の時勢を理解させる。それにより、国家を愛し、時事に関心を持たせ、忠実で自立した良い習慣を育成する⁽⁶⁴⁾ (穆 1925)。

この教科書の中に収録された二十九篇は十組に分かれており、それぞれの組の目的について、「現代の青年の使命を表現し、彼らが現実を捨てるとする誤りを糾す」こと、「現実の社会の状況から最も重要な三つの問題を提出する。一つ目は強盗、二つ目は兵士、三つ目は民衆の失業である」こと、および「青年の現代研究を導き、史実に基づき、社会問題の原因を追究すること」⁽⁶⁵⁾などが挙げられている。

教科書の中の二十九篇の文章の中で、特に注目したいのは、惲代英主編の雑誌『中国青年』掲載の文章六篇が収録されていることである。例えば、蕭楚女の「詩的生活与方程式的生活」⁽⁶⁶⁾、および左舜生の「中国青年与「現代研究」」⁽⁶⁷⁾などがある。

『中国青年』は 1923 年に惲代英により創刊された雑誌であり、中国社会主义青年団の機関紙でもある。胡風自らは、「当時『中国青年』に載っていた蕭楚女と惲代英の鋭い文章に惹きつけられた」⁽⁶⁸⁾と語っており、彼が『中国青年』を読み、深い印象を持っていたことが窺える。

雑誌『中国青年』では、1923 年末から 1924 年まで、新文学に傾倒した文学青年や新文学を批判する文章が相次いで発表されている。その主な論理は、新文学は社会の進歩にとって無用であり、青年たちは社会現象を解釈し、社会問題を解決できる社会科学を最優先に学習すべきであるというものであつた。それはなぜかという、青年たちは無用な新文学に夢中になつてはならず、社会に関心を持つべきだからである⁽⁶⁹⁾。

蕭楚女と惲代英とも関係が深い穆済波が、以上の主張に共鳴したのはごく自然なことであつ

たと思われる。穆が考えていた高級中学の国文教育の目的は、青年に社会の現状や問題への関心を持たせることであつた。その目標は、前節で述べた共同必修科目の社会学と近いものである。その共通性こそ、いかに社会科の教育を国文科と関係付けるか、という問いに対する答えであつたと思われる。

以上のように、東大附中高級中学における新文学、または白話文教育提唱者であつた孫俚工と穆済波という二人の教師は、それぞれ異なる立場にあつた。孫俚工は歴史、政治や社会に関する評論文などのような知的な「雑文学」より、感情を表す「純文学」を重視した。それに対して、穆済波は雑誌『中国青年』の主張に共鳴し、社会現象や社会問題を解釈できる文章を好んで収録した。このような国語・国文の教育は、社会学と同様に、学生の社会問題への関心、および社会への責任感を喚起するという目的を持っている。胡風が東大附中で受けた新文学の教育の特徴は、孫俚工のことばを借りて説明すると、感情的な「純文学」と知的な「雑文学」その両方であつたと思われる。

V 終わりに

はじめにでも引用したが、胡風は東大附中時代を回想する際に、「N城〔南京〕での二年あまりの生活では、大学のW君と私より一学年下のY君に促され、私はより多くを知り、社会により関心をもって触れるようになった。」（ ）と述べている。とはいえ、当時の東大附中に在学していた胡風は、二人の影響以上に、むしろ学生が社会へ関心を持つべきことを主張する環境にあつた。

具体的には、東大附中では社会学が必修科目として設けられ、授業の中で学生が団結して団体生活を過ごし、社会問題とその解決策を見出し、社会に対する責任を負うことを呼びかけている。こうした必修科目を履修した胡風も、青年たちが団体の力を発揮し、社会に対する個人の責任を果たすことを唱えている。胡風が述べる社会に対して目を開かされたことの中で、この社会学の授業も役割を果たしたのである。

また、東大附中の高級中学が国語・国文教育における古典文学を重視する傾向にあつたにもかかわらず、孫俚工と穆済波のような白話文の教育を提唱した教員もいた。特に穆済波は、高級中学の国語・国文教育の目的を青年に社会の現状や問題への関心を持たせることと考えて、雑誌『中国青年』における社会現象や社会問題を解釈する評論文章を自らが作成した教科書にも収録した。このような国語・国文教育の目的は、社会学と同じく、学生の社会問題への関心を引き起こすことにある。東大附中時代に社会に関心を持ち始めた胡風は、東大附中における国文・国語教育にも影響されたとも言える。

前述した通り、東大附中時代の胡風は文学にますます敏感になり、恋愛と芸術が人生の至上の両面であると感じる一方、こうした感覚は自分の社会行為と矛盾しはじめたと書いている。ここでの社会行為とは、東大附中における社会学と国語・国文科の授業に喚起される、社会における個人の責任を果たすことであろう。胡風が感じた矛盾は、文学作品に心を奪われ、恋愛と芸術を人生の中のなにか至上なものの両面と考えている自分が、いかに社会問題を発見し、解決し、社会への責任を果たせるのかということであろう。言い換えればそれは、いかに社会に対する自分の責任を負うのかという主体性の問題である。胡風が日本から帰国した後に、日本での留学が七、八年にわたる社会観と芸術観の矛盾を解消したと述べているが、日本におけるプロレタリア理論の学習は、その主体性の問題を解決するためであつたのではなからうか。

注

- (1) 胡風 1934 「理想主義者時代的回憶」、267 頁。原文は「友人日比君第一次引着我去参加了那里的「芸術学研究会」，是两年以后的事。房子中間有一個長的舊台子，四周的破椅子和啤酒箱子上面坐滿了人。有熱情的，有鎮靜的，但一律地是真誠的面孔。他們用了並不高的聲音發言，討論，爭吵，但他們的主張是在日本的文芸界和大衆里面洪亮地响着的。在那滿是紙烟霧的污悶空气里面，我弄明白了我這戰敗了的理想主義者到底是什么一回事，解消了糾纏過七八年的社会観和芸術観の矛盾。」

- (2) プロレタリア科学研究所は、1929 年 10 月に創立された文芸組織である。機関誌は『プロレタリア科学』である。創立の時に、秋田雨雀を所長とした。(山田清三郎・川口浩 1996 『近代用語の辞典集成 31』参照。)
- (3) 胡風 1936 「文芸筆談・序」、3 頁。原文は「直到一九三一年遇到了几个給我以启蒙的芸術理論教育的友人以前，我和文芸的交涉差不多只是限于滿足自我的欲求，在文芸世界里発見自己，提高自己。那表現之一是我非常地鄙視“文芸批評”。在他人的心血結晶上面指手画脚，說好說坏，我以為那是最沒有出息的事情。」
- (4) 蔵原惟人 1931 「芸術的方法についての感想」（前編・後編）。
- (5) 梅志 1998 『胡風伝』、226-227 頁。原文は「《納普》上發表了在地下的蔵原惟人用“古川莊一郎”的名字写的《关于芸術方法的感想》，解決了他的一些長期無法解決的理論問題，对他以后的写批評文章起了最初的推動作用。」
- (6) 1920 年代における新文学の状況については、姜濤 2015 『公寓里的塔』参照。
- (7) 同注 1、262 頁。原文は「在 N 城两年多的生活里面，大学里的 W 君和比我低一級的同学 Y 君推着我更多地知道了，更关切地触到了社会。但同时对于文学的气息也更加敏感更加迷惑了。這時候我讀了兩本沒頭沒腦地把我淹沒了的書：托爾斯太的《復活》和厨川白村《苦悶的象征》。恋愛和芸術，似乎是表現人生里面的什么至上的東西的两面，和我的社会行為漸漸地矛盾起来了。」「W 君」とは、啓黄中学の卒業生、東南大学の学生の宛希儼（1903-1928）である。1923 年 7 月に共産党に参加し、1928 年に国民党に処刑された。「Y 君」は胡風友人の楊超（1904-1927）である。1923 年に東大附中の初級中学三年生であった。1925 年の五三〇運動の後、共産党に参加した。1927 年に処刑された。
- (8) 近藤龍哉 1978 「胡風研究ノート（1）」
- (9) 伊禮智香子 1996 「日本留学以前の胡風」、伊禮智香子 2015 「国民政府下の胡風の歩みをふり返る」
- (10) 呉宝林 2019 「作為「雄辯員」「総編輯」与「委員長」的胡風」
- (11) 穆濟波（1889-1976）、四川省出身。1918 年に国立成都高等師範学校を卒業し、少年中国学会に参加した。1922 年から東南大学附属中学で国文の教師を務めた。
- (12) 曉風 1986 「胡風年表簡編」
- (13) 「国立東南大学附属中学校録取新生通告」『申報』1923 年 8 月 1 日。
- (14) 廖世承 1924 『施行新学制後之東大附中』、75 頁。
- (15) 南京高師から東南大学までの歴史は、南京大学校慶辦公室校史資料編輯組・南京大学学报編輯部（編）1982 『南京大学校史資料選輯』参照。
- (16) 同注 5、121 頁。原文は「這個学校是属于實驗性質的，以新的教学方式聞名全国。实行道爾頓制，受美国杜威的实用哲学影响，在教学方面比較自由开放，培养学生各方面的能力。与启黄中学那种保守落后的封建教育方式完全不同。」
- (17) 胡風 1981 「我的小伝」
- (18) 「ドルトンプランについて」DALTON SCHOOL : <https://www.dalton-school.ed.jp/about/daltonplan.html> (2024 年 1 月 24 日最終確認)
- (19) 王少麗 2019 「廖世承在東大附中的教育改革研究（1919-1927 年）」
- (20) 廖世承 1925 『東大附中道爾頓制實驗報告序言』
- (21) 同注 14。
- (22) 上野正道 1945 『ジョン・デューイ』
- (23) 同注 22。
- (24) 劉勝男 2009 「20 世紀初期のデューイの訪中の背景と当時の人々の反応」
- (25) 川尻文彦 2009 「陶行知とデューイの訪中」
- (26) 胡適 1919 「實驗主義」、19 頁。原文は「对于实行的教育制度上，杜威的两大主張是：（1）学校自身須是一种社会的生活，須有社会生活所应有的種種条件。（2）学校里的学業須要和学校外的生活連貫一气。」
- (27) 馮建軍 2019 「杜威中国之行与南高師」

- (28) 「壬戌学制」とは、中華民国政府が 1922 年に 11 月 1 日に制定した学制である。正式名は「学校系統改革案」である。アメリカモデルの六・三・三、つまり小学校 6 年・初級中学 3 年・高級中学 3 年という制度を導入したものである。（璩鑫圭、唐良炎（編） 2007『中国近代教育史資料匯編・学制演變』）
- (29) 山下大喜 2023「胡適によるジョン・デューイ思想の受容と展開」
- (30) 同注 19。
- (31) 世良正浩 2013「壬戌学制制定課程研究」
- (32) 同注 14、1 頁。
- (33) 同注 14、61 頁。
- (34) 同注 5。
- (35) 廖世承 1923「本校編制新学制課程的經過狀況」、1 頁。原文は「發展青年個性」「增加教育效率」
- (36) 同注 14、56 頁。原文は「為卒業後服務社会起見，設職業教育及師範組。」
- (37) 同注 35、3 頁。原文は「我們主張初級中学必修科内，加增社会常識一門；高級中学必修科目内，加增世界文化史一門。現時中学生的社会常識，太嫌缺乏；对于近代各国的學術政教，更少理会。」
- (38) 同注 14、72 頁。原文は「高中第一系注重文学及社会学科」
- (39) 同注 14、77-224 頁。
- (40) 同注 14、160-170 頁。
- (41) 同注 14、160-161 頁。原文は「本科教育目標，總言之，為教導学生能適應現代的社会生活。使他对于現社会中好的事情能為忠誠的貢獻，于坏的又能為急進的改革者。分別言之，則：（1）使学生明白人我之關係。（2）使学生知道自己在各種团体中所占之位置。（3）使学生知道学校，家庭，以及其他社会機關，社会事業之變遷及趨勢。（4）使学生明白各種社会生活問題之所在及其应付方法。（5）使学生有参加团体生活之志願及習慣。（6）使学生的思想，感情，行為皆為社会化。同時他又是個自立自治的國民。」
- (42) 国立東南大学・南京高師附属中学（編） 1921『中等教育（新学制課程大大綱号）』1（3）
- (43) 同注 43、54 頁。引用した部分の原文は、「原始团体生活」「团体的道德」「道德生活中理性之位置」「道德生活中義務之位置」「由团体道德變為個人道德」「經濟秩序的原理」「市民的社会与政治的国家」
- (44) 同注 43、57 頁。原文は「本課程之目的在使学生對於社会上個別的問題，能加以精密之研究，以謀改進社会為己任。」
- (45) 同注 44。以下引用した内容の原文は「個人和社会的關係」「我們理想的社会」
- (46) 胡風 1924「現在的青年何以不喜歡團結——答劉巍君」、143 頁。原文は「最重要的是大家并不覺得朝代已經改變了。从前的国家大事盡可讓君主將相去辦理，現在确是“天下興亡匹夫有責”了。从前的儒者遇着乱世盡可賦“歸去來兮”，我們現在却万丟不掉个人对社会的責任！光顧自己是不行的，就是把“将来”標榜起来也是不行的，最好是即時團結起来担負你的責任！我們現在無論从社会生活方面看，从个人修养方面看，團結總是我們生活的一部。」
- (47) 同注 14、170 頁。原文は「聯絡他科教学—尤其是国文与社会学科。」
- (48) 陳鑒 1992「「附中精神」永不忘」、39 頁。原文は「語文（当时称国文）教師有兩派：攻古典文学和古詩詞的有陳席儒先生和薛鴻猷先生，他們造詣深，影響が学生对古文学的愛好。另一派是提倡白話文的孫俚工先生和穆濟波先生，兩先生思想進步，提倡五四精神，引導同學們看了不少進步書刊，所以同学中如一六級以前的張光人（胡風）一六級的顧衡〔中略〕等，都很早就参加了革命，有的還成為人們永遠懷念的烈士。」作者の陳鑒は 1902 年に生まれた。1923 年に東大附中の初級中学一年に入学した。
- (49) 多賀秋五郎 1975『近代中国教育史資料（民国編中）』
- (50) 胡適 1920「中学国文的教授」
- (51) 同注 14、77-81 頁。
- (52) 同注 14、81 頁。

- (53) 同注 14、102-106 頁。
- (54) 胡風 1983 「我所知道的東大附中革命運動的情況」、16 頁。原文は「当時附中の主任は廖世承，一位進歩的教育家。教員有穆濟波、嚴濟慈、孫俚工、李儒勉、楊効春等，也都是進歩的。」
- (55) 同注 14、252 頁。
- (56) 孫俚工 1922 「文芸在中等教育中的位置与道爾頓制」、孫俚工 1923 「新文芸建設発端」。
- (57) 孫俚工 1922 「文芸在中等教育中的位置与道爾頓制」、5 頁。
- (58) 同注 57、4-6 頁。原文は「文芸底内容，就是詩歌、小説、戲劇，前面已經稍微說過了。這三者又称純文学，以別於非文芸的雜文学而言。（中略）純文学底特色是情的，故彼底内容与形式以表現美為目的；雜文学底特色是知的，故彼底目的在於實用；因此又有人把文学分為实用的文章（普通文）与美術的文章（美文）二種。」
- (59) 同注 57、9 頁。
- (60) 同注 5、121 頁。原文「尤其是国文課，上下古今都可以自由發表意見，老師只是引導大家討論或加以総結論述。老師名叫穆濟波，四川人。在古文方面很有造詣，新文学方面看書也不少。據說，他原来在四川和肖楚女等人一起从事革命活動，辦過進歩報紙，後來脫離政治改行教書。」
- (61) 汪季琦 1997 「東大附中的革命活動」
- (62) 李斌 2016 『民国時期中学国文教科書研究』
- (63) 穆濟波（編） 1925 『高級国語読本』中華書局。
- (64) 「教材支配表」、同注 63。原書にはページ数が記載されていない。本の冒頭部の構成は、編集大意、目次、教材支配表である。原文は「在能使学者在読書生活中了解現代国家大勢，以長其愛国憂時堅貞自勵之良習。」。
- (65) 同注 64。原文は「表現現代青年之使命，糾正其遺弃現實之非。」「由現實的社会狀況中提出最重要之三大問題：一匪二兵三民众的失業。」「引導青年研究現代，根据史実，追求社会病象之総原因。」
- (66) 楚女 1923 「詩的生活与方程式的生活」
- (67) 舜生 1923 「中国青年与「現代研究」」
- (68) 胡風 1977 「簡述收穫」。原文は「当時《中国青年》上蕭楚女、惲代英的尖銳犀利的文章吸引了我。」この文章は、胡風の自らの思想についての報告書である。
- (69) 姜濤 2009 「革命動員中的文学和青年」
- (70) 同注 7。原文は「在 N 城两年多的生活里面，大学里的 W 君和比我低一級的同学 Y 君推着我更多地知道了，更关切地触到了社会。」

引用・参考文献

和文文献（著者五十音順）

- 伊禮智香子 1996 「日本留学以前の胡風—「理想主義者時代」の模索」『駒澤大學外国語部論集』43、79-95 頁。
- 2015 「国民政府下の胡風の歩みをふり返る——『策進週刊』掲載の「零想」シリーズを読む」『野草』95、1-19 頁。
- 上野正道 1945 『ジョン・デューイ—民衆主義と教育の哲学』岩波新書。
- 川尻文彦 2009 「陶行知とデューイの訪中：民国初期中国教育史の一側面」森時彦（編）『20 世紀中国の社会システム』京都大学人文科学研究所、431-457 頁。
- 近藤龍哉 1978 「胡風研究ノート（1）：その理論形成期についての伝記的考察」『東洋文化研究所紀要』75、343-425 頁。
- 蔵原惟人 1931 「芸術の方法についての感想」（前編）『ナップ』2（9）、12-35 頁、いま 1967 『蔵原惟人評論集』第 2 巻、新日本出版社、180-219 頁。

- 1931「芸術的方法についての感想」（後編）『ナップ』2（10）、52-77 頁、いま 1967『蔵原惟人評論集』第2巻、新日本出版社、220-261 頁。
- 世良正浩 2013「壬戌学制制定課程研究—全国教育会連合会年会における学制改革に関する決議案の分析を中心に」『人間の発達と教育：明治学院大学教職課程論叢』9、1-30 頁。
- 多賀秋五郎 1975『近代中国教育史資料（民国編中）』日本学術振興会。
- 山下大喜 2023「胡適によるジョン・デューイ思想の受容と展開：実験主義の信徒として」『教育科学』69（2）、135-145 頁。
- 山田清三郎・川口浩 1996『近代用語の辞典集成 31：プロレタリア文芸辞典』大空社。
- 劉勝男 2009「20 世紀初期のデューイの訪中の背景と当時の人々の反応—『デューイが中国で発表した講演』に焦点を当てて—」『教育論叢』52、13-21 頁。

中文文献（著者ピンイン順）

- 陳鑒 1992「『附中精神』永不忘」南京師範大学附属中学校校友会（編）1992『青春是美麗的』貴州人民出版社、38-41 頁。
- 楚女 1923「詩的生活与方程式的生活」『中国青年』11、7-9 頁。
- 馮建軍 2019「杜威中国之行与南高師—東南大学教育学科的発展」『東南大学学報（社会哲学版）』21（4）、5-13 頁。
- 「国立東南大学附属中学校録取新生通告」『申報』1923 年 8 月 1 日。
- 国立東南大学・南京高師附属中学校（編）1921『中等教育・新学制課程大綱号』1（3）上海中華書局。
- 胡風 1924「現在の青年何以不喜歡迎團結——答劉巍君」『申報・教育与人生週刊』（34）、414 頁。引用は、宮立 2019『中国現代作家佚文佚簡考釈』北京大学出版社、155-157 頁。
- 1934「理想主義者時代的回憶」鄭振鐸・傅東華（編）1934『文学』生活書店、257-267 頁。
- 1936「文芸筆談・序」『文芸筆談』上海生活書店。引用は 1999『胡風全集（第2巻）』湖北人民出版社、3-5 頁。
- 1977「簡述收穫」。引用は 1999『胡風全集（第6巻）』湖北人民出版社、601-682 頁。
- 1981「我的小伝」『新文学史料』1、101-104 頁。引用は 1999『胡風全集（第7巻）』湖北人民出版社、207-213 頁。
- 1983「我所知道的東大附中革命運動的情況」南京師範大学附属中学校校友会（編）1992『青春是美麗的』貴州人民出版社、15-16 頁。
- 胡適 1919「実験主義」『新青年』6（4）、4-20 頁。
- 1920「中学国文的教授」『新青年』8（1）、20-31 頁。
- 姜濤 2009「革命動員中の文学和青年——从 1920 年代《中国青年》の文学批判談起」『中国現代文学研究叢刊』4、1-19 頁。
- 2015『公寓里的塔——1920 年代中国的文学与青年』北京大学出版社。
- 璩鑫圭・唐良炎（編）2007『中国近代教育史資料匯編・学制演變』上海教育出版社。
- 廖世承 1923「本校編制新学制課程の經過狀況」国立東南大学・南京高師附属中学（編）『中等教育・新学制課程大綱号』1（3）、1-80 頁。
- 1924『施行新学制後之東大附中』中華書局。
- 1925『東大附中道爾頓制実験報告序言』商務印書館。
- 李斌 2016『民国時期中学国文教科書研究』北京大学出版社。
- 梅志 1998『胡風伝』北京十月文芸出版社。
- 穆濟波 1923「中学校国文教學問題」『中等教育』2（5）。引用は、顧黃初・李杏保（編）1991『二十世紀前期中国語文教育論集』四川教育出版社、258-270 頁。

——（編） 1925『高級国語読本』中華書局。

南京大学校慶辦公室校史資料編輯組・南京大学學報編輯部(編) 1982『南京大学校史資料選輯』南京大学校慶辦公室校史資料編輯組・南京大学學報編輯部。

舜生 1923「中国青年与「現代研究」」『中国青年』10、1頁。

孫俚工 1922「文芸在中等教育中的位置与道爾頓制」『教育雜誌』14 (12)、1-14頁。引用は、孫俚工（編）1923『新文芸評論』上海民智書局、1-21頁。

—— 1923「新文芸建設発端」孫俚工（編）1923『新文芸評論』上海民智書局、23-38頁。

汪季琦 1997「東大附中的革命活動」許祖雲（編）1997『青春是美麗的（統集）』華夏出版社、9-11頁。

王少麗 2019「廖世承在東大附中的教育改革研究（1919-1927年）」上海師範大學修士論文。

吳宝林 2019「作為「雄辯員」「総編輯」与「委員長」的胡風——以新見『東南大学附中週刊』為中心」『文学評論』3、92-100頁。

曉風 1986「胡風年表簡編」『新文学史料』4、173-187頁。